

校長先生の初恋物語

第59話 このクラスにぼくがいなかったら

5月のリレーで、またビリになって、周りのクラスからばかにされて、みんな悔しくて悔しくてたまらないまま教室にもどってきました。最後にもどってきたのは、きのこ君でした。きのこ君がくると、きんに君がつつい言ってしまったんです。

「きのこ君がいるから、いつもぼくたちはビリなんだ。きのこ君のせいだぞ。きのこ君、もっとまじめに走ってくれよ。」

とてもひどい言葉です。でも、きんに君はいつもはこんなことを言うてしまうような人ではありません。いつもは思いやりのある、楽しいきんに君なのです。きんに君は、あまりにもビリが続いたために、そして他のクラスからあまりにもばかにされたために、つつい言ってしまったんです。

よしこさんが、とっくんの服をつんつんと引っ張りました。それは、「きんに君を止めて。」というサインです。でも、とっくんは、なかなか体が動きません。学級委員の出番だというのに、動こうとしません。それは、きんに君が言った言葉は、その時のとっくんの心の中にもあった言葉です。「きのこ君がいなければ、勝てるんだ。」とっくんもそう思ってしまっただけです。

きのこ君はみんなにあやまりだしました。



「みんな、ごめんね。ぼくが遅くて、ごめんね。」きのこ君のことをいつも守っているあのジャイアンが、きのこ君を助けに行きませんでした。いつもだったら、きんに君のところになぐりかかっていきそうなのに、ジャイアンは外を見ていました。もしかしたら、ジャイアンも、ビリがくやしいのかもしれない。もしかしたら、ジャイアンも、きのこ君がいなければって思ってしまったのかもしれない。

まじめ君は、声をふるわせながらさらに言いました。

「ごめんね。ごめんね。ぼくがこのクラスにいなければ勝てるのに。」

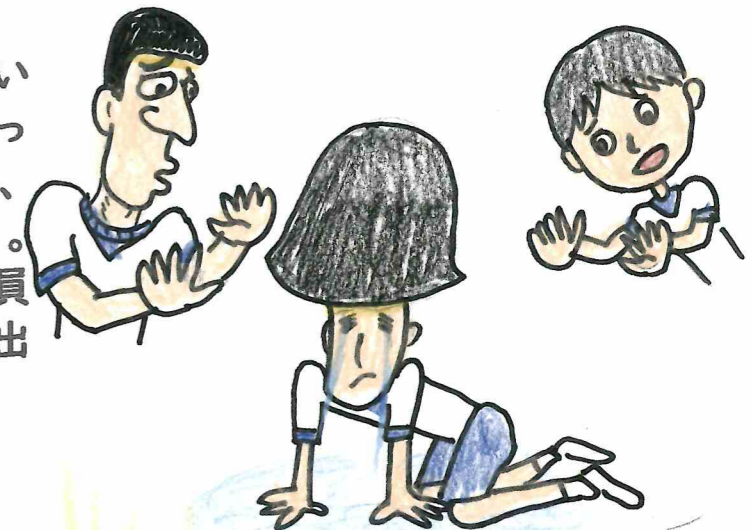
きのこ君を助けてあげないといけません。言ってしまうと、後悔しているきんに君を、助けてあげないといけません。それができるのは、学級委員のぼくだ。今こそ、ぼくの出番だと、そう思いました。

その時です。

「ガガッ。」

と大きな音がしました。一人の少年が、いすからいきおいよく立ち上がった音です。みんな、その少年の方をいっせいに見ました。少年は、ゆっくりと、きのこ君の方に近づいていきました。少年は輝いて見えました。

リレー大会で傷ついて、みんなの心がばらばらになりかけそうな心。ビリの責任を感じているきのこ君の心。つつい言ってしまったいけない言葉に後悔しているきんに君の心。そんなみんなの心を助けてくれた少年とは。



次回予告

よしこさんのハートの目

